

國府さんのいた松本

金井 直 (信州大学人文学部准教授)

早いもので、信州松本に来て8年が過ぎた。芸術コミュニケーションという分野に属し、実際のところアート系雑芸員よろしく学内外をかけずり回っているが(長野県には美術館と称する施設がたくさんあって、その分、よいこともそうでないこともたくさんある)、ともあれ、授業の中心はワークショップ演習。私の場合は、学生にほとんどお任せの展覧会づくりだ。去年は渡辺英司さんを中心に、青田真也さん、小栗沙弥子さん、堀田直輝さんに参加していただいて、学内展を実施。一昨年は、松本市内の菓子店を舞台に、佐々木愛さんと文谷有佳里さんの作品を紹介した。大学の仕組みのなかで、作家さんにもなにかとご迷惑をかけながら進めるこの展覧会運営ゼミは、けっして安定したものではないのだが、それでも学生や街の人々の思いに支えられて、なんとかここまでやってきた。参加してくださった作家さんにはあらためてお礼を申し上げたい。

ところで、このゼミ活動をここまで繰り返してきた発端は、というと、実は國府さんなのだ。信州大学着任初年度の終わり頃だったと思う。松本市美術館の学芸員さんに、数日間だけ企画展示室が空くのだけれど、なにかやりますかと声をかけられて、即座に浮かんだのが國府さんの存在。広い展示室内をKOKUFUMOBILで走り抜けたら気持ち良さそうだ、信州の澄んだ空の下で風を受けるセイルを見てみたい、そんな直感や期待に正直に、早速、國府さんに連絡を取ったのだった。

限られた準備期間と予算。経験値ゼロの学生たち。右往左往するばかりの私。本当に危うい状態だったが、だからこそ、どっさり作品を積んだ國府さんの軽トラックと月岡さんの車が美術館の搬入口に入ったときは、本当にうれしかった。懐かしい京都の現代美術の空気が、いっぱい詰まっていた。

展覧会は大成功だった。良質の展示空間のなか、白い台座上にKOKUFUMOBILがずらっと並ぶ。学芸のみなさんが、よい照明を作ってくれた。その傍ら、可動壁を取り払った空っぽの展示室が言わばテストコース。台座からおろされた“ヴィークル”が、それぞれのスピードとトルクで駆け抜けていく。お客さんにも、美術館職員のみなさんにも、そして國府さんにも気持ちのよい笑顔があった。学生たちにも未知の世界に分け入ったよろこびと、想像力を肯定することからはじまる緩やかな連帯の感情が満ちていた。“これだ”と思った。美術館の中庭で白いセイルをみんなと

一緒に見上げたとき、この街で私が取り組むべきことが見えた気がした。

そもそも美術館を離れるときには、大学でおとなしく美術史の教員をやるつもりだったのが、一転、アート・プロジェクトの実践が本業のひとつとなり、以来、7回の展覧会をゼミ活動としておこなっている。たぶんこれからも。一地方都市の潜在力をもってアートを生かすこと、アートの想像力を糧にこの小都市をまもりつづけること。とりわけ2011年3月以後という文脈において。それを信じ、協働してくれる卒業生たちもいる。あの日、いっしょに白いセイルを見上げた面々もいる。國府さん、ありがとう。すべてはあなたの松本入りからはじまりました。